

こぎん刺しのモダニティに関する人類学的研究

石栗美帆子

1. はじめに

こぎん刺しは、200年以上前に津軽の農村女性によって始められたとされる。木綿の着用を禁じられた農民は、麻の着物の補強・保温のために刺し子をした。その刺し子が発展したものがこぎん刺しと考えられている。こぎん刺しは、一枚の貴重な麻布を長持ちさせ、寒さに耐えるための生活の知恵であった。また明治時代、美しいこぎん模様を刺せることは、手先が器用で根気強く、頭が良いことの表れとされ、良い嫁の指標となった(横島 1974: 45,146)。

明治20年代に全盛期を迎えた後、温かく丈夫な木綿布が入手可能となったことで手間暇のかかるこぎんは廃れてしまう。だが大正から昭和初期、こぎん蒐集家の出現と民芸運動の創始者柳宗悦に見出されたことにより再び注目を集め、着物としてのこぎんは収集・研究の対象となった。現在では着物としてのこぎん刺しは衰退したが、その模様は小物の装飾として復活し、こぎん刺しを施した布を財布・ポーチ・しおり・コースターなどの小物に縫製し販売されている。着物から離れて自由な創作活動が行われている現在のこぎんは、伝統工芸や商業や美術などさまざまな文脈の中にある。本研究では、着物という衣服から離れたこぎんが現代において、どのような人々によって支えられているのか、こぎん商品とその商品づくりの現状をとおして、今まさに生成されつつあるこぎん刺しの現在について考えていく。

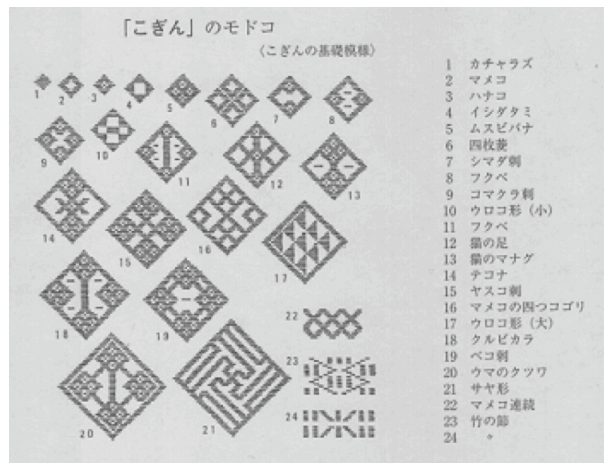


図1 こぎんの単位模様 (成田 1999 より引用)

2. 現在のこぎん：ローカルからグローバルへ

(1) こぎんの模様

こぎんには、模様の基本となる単位模様(図1)がある。単位模様には、日常生活や自然環境からその模様にあふさわしい呼名が付けられた(ハナコ=花、テコナ=蝶々、マメコ=豆など)。昔はこの単位模様をひとつひとつ覚えながら刺していった。そして、単位模様を複数組み合わせることで大きな模様を作る。ここではこの大きな模様を構成模様(図2)と呼ぶ。

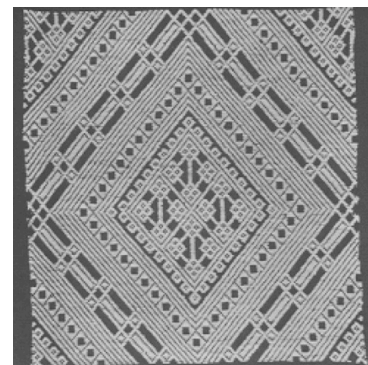


図2 構成模様

現在は、構成模様を方眼紙におとしこんだ図案を見ながら、実際に布に模様を刺していく。そして、構成模様が刺された布は縫い合わされてポーチなどに加工される。この加工段階を縫製と呼ぶこととする。現在販売されているこぎん商品はどのような文脈にあるのか以下で例をあげてみていこう。

(2) 非真正なこぎん商品

青森市の A 商店は、津軽塗りとこぎんを中心にあつかう土産物店である。店では、店主 a が作った商業的で簡素なこぎん商品を販売している。a は、質・値段ともに高い有限会社 B (後述)の商品との差別化を強く意識しており「Bのは、他のに比べてあか抜けてるし、ものもいいんだけど高いでしょう。私は手かずかけずに、見栄えのするものをお求めしやすい価格で提供しようと思って」と話す。a の商品は、巾着やティッシュケース



写真1 a の作ったティッシュケース

ケース (写真1) に小さな単位模様がワンポイントとして施されておりもともとこぎんが布の保温補強のためであったとことは感じられない。また、a の商品以外にも簡素なこぎん商品として、布に刺したこぎんをコピーし、それをネクタイの布・ノート・ファイルケースにそのまま印刷した商品がある。布に刺したこぎんは、一つ一つが手作りで同じものはないが、プリントされた“こぎん柄”のネクタイやファイルケースは全く同じ複製が存在する。これらの商品は簡素で非真正なこぎん商品なのである。

(3) 斬新なこぎん商品

また、伝統にとらわれない斬新なこぎん商品もある。青森市在住の雑貨作家 C は、伝統的な模様を用いず、自分で独自に生み出した魚や蝶をイメージした単位模様 (写真2) を用いてトートバックや髪飾りなどを制作販売している。これ以外にも斬新なこぎんの例として、こぎん教室 D のメンバーが製作販売していたバック (写真3) がある。これはルイ・ヴィトンのバック (写真4) からインスピレーションを得たものである。単位模

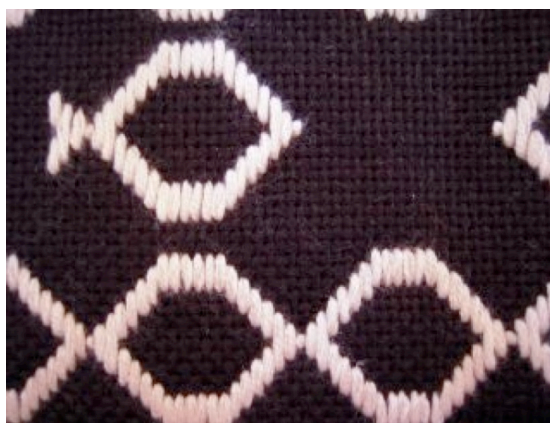


写真2 独自に生み出した魚の単位模様

様だけをみると、伝統的な「虫食い」という単位模様を用いており、こぎんの伝統を重んじているように見える。しかし構成模様の段階で、同じ模様を繰り返すルイ・ヴィトン



写真3 ルイ・ヴィトンを意識したバック



写真4 ルイ・ヴィトンのバック

のモノグラム模様を意識し、虫食いの単位模様を繰り返し刺している。また、バックの形や持ち手もルイ・ヴィトンを意識して作られている。このようにこぎんという青森の伝統工芸の中に世界的なブランドという新しい要素を持ち込んでいるのだ。

(4) 美術作品としてのこぎん

さらには、こぎん作家 E の作品のように美術作品として扱われるこぎんもある。D が開いた個展では、こぎん刺しの布を額に入れた作品 11 点と 130 cm×260 cm の大きなタペストリー兼テーブルクロス 1 点が展示・販売されていた。これは東京の人から依頼を受けて制作したもので、約 10 ヶ月かけて完成させたものである。額に入れた作品には 18,000 円（布の大きさは約 7 cm×20 cm）～50,000 円（約 25 cm×30 cm）という高値がつけられていた。E の作品は、ホテルのロビーや客室などにも飾られており、芸術市場で取り引きされているこぎんといえる。

3. 手仕事としてのこぎん

(1) 伝統的なこぎん

集落や家というローカルな空間のなかで着物として用いられていたこぎんだが、現在のこぎん商品は、ここで例をあげたように多様な文脈のなかにある。しかし、単純にローカルからグローバルへという動きのなかだけでこぎんを理解することはできない。こぎん生産をもっとも大規模におこなっている有限会社 B の商品づくりは産業として成立しており、外国人観光客を意識して B の商品には英語での説明書も添えられている。だが、実際にこぎん刺しを担う B の内職の刺し手に目を向けると、そこにはグローバルやモダニティに染まりきらない手仕事の経験がある。ここからは B の商品づくりをとおして、こぎんという手仕事について考えていこう。

有限会社 B で働く職員は 8 人で、こぎんを布に刺す作業は約 60～90 人の内職の刺し手（18～83 歳の青森県内在住の女性）が支えている。職員が考えた構成模様の図案を見ながら、刺し手はひと針ひと針こぎんの模様を刺していく。有限会社 B では、昔のこぎんに近

い糸や布を用い、伝統的なこぎん模様を昔ながらの刺し方でやるよう内職の刺し手に指導したりして、材料や模様・技法の面で伝統的なこぎんであることを重視している。その一方で、現在の生活でも使えるこぎん商品づくりを目指し、名刺入れやバック、箸入れ、携帯ストラップなどに縫製している。縫製の面では常に需要や流行に敏感で、消費者の要望に応えながら商品を作り変えている。その結果、現在商品の種類は100を越えている。

(2) ゆるやかな時間

ここで、こぎん商品の中核である「刺し」を担う内職の刺し手に注目しよう。刺し手の特徴として、聞き取り調査から次の5つがあげられる。①刺し手の工賃は非常に安く、お金のためにやっている仕事ではない。②刺し手は、こぎん刺しを仕事だとは認識していない。仕事と思って始めた人もいるが、やがては遊び・楽しみといった言葉に収斂されていく。③自分が刺しているこぎんの単位模様の名前を知らず、職員から渡された図案を見ながらそのとおりに刺していく。模様の名前を知らない刺し手からは「伝統工芸を担っている」という意識は感じられない。しかし、職員から渡される材料・図案や刺し方が伝統的なものに規定されることで、意識せずとも刺し手の手は「伝統」をつないでいく。④「なんもやってねば手持ち無沙汰」「ただテレビ見てるのはダメ。手動かさない」というように、何もせずにいられない勤労意識がある。⑤職員は、内職者が仕事を続けやすいよう仕事の量を調整したり、締め切りを設けないといった配慮をしたりしており、ゆるやかな時間のなかで続いている仕事である。

(3) 手仕事自体への喜び

内職の刺し手は、その仕事の形態ゆえに客の反応や評価を受け取る機会にはほぼない。そのため他者からの評価や、接客や販売業績などを通じて得られる喜びではなく、布と向き合ってすすめる手仕事の喜びが際立つ。私は最初、10 cm四方の一枚の布を刺した工賃が150円と聞かされたとき、こんなに手のかかるものの工賃があまりに安いことに驚き、こぎんの販売価格を考えると「もっと刺し手に収入があっても良いはずだ」と感じた。だが本当にそうなのであろうか。工賃が安すぎると感じたのは、私が市場経済や他からの評価で考えることに慣れきっていたからではないのか。刺し手と話をし、自分でもこぎんを刺してみるうちに、値段のつけられない、もっと別の価値があるのではないかと感じるようになった。それは、客の顔を見た喜びや経済的利益ではない、刺し手自身が手仕事のなかに見出している手仕事に対する純粋な喜びや価値である。こぎんは、ただ数の法則に従って刺すという単調な動作の繰り返しによって、美しい模様がうかびあがる。ひと針ひと針刺していく動作は簡単だが、非常に根気のいる作業だ。一段一段手をかけて浮かび上がった模様には愛おしささえ感じる。昔のこぎんが、ローカルな集落のなかで自分のため家族のために刺されていたとき、そのこぎんは値段がつけられるものではなかった。工賃は「孫のジュース代だよ」と笑う刺し手のように、自分で稼ぐことの喜びはもちろんあるだろうが、

刺し手にとって、この手仕事は、工賃としてお金に換算するようなものではない。模様がだんだんとかびあがる喜び、楽しさ、これをして時間を過ごしたという証し、達成感・・・そういったお金にならない価値をもたらすのが刺し手にとっての手仕事なのだ。

では、客の顔が見えない場所で手を動かす内職の刺し手は、市場や消費者とは無関係なのだろうか。そうではない。内職という形態と低い工賃でこの単純労働がおこなわれているということ自体、近代的な産業構造のなかにこの手仕事があることを意味している。しかし、そのような近代の産業構造にあつて、モダニティやグローバル化に染まりきらないのが内職の刺し手の経験なのである。低賃金で手間暇のかかる手仕事であるがゆえに、そこにはお金を得ることや評価されることではなく、刺し手と布との関係から紡がれる経験から、手仕事自体への喜びがよりいっそう浮かび上がってくるのである。

<引用文献>

アンソニー・ギデンズ 1993『近代とはいかなる時代か？——モダニティの帰結』而立書房
磯部卓三 1998『道徳意識と規範の逆説』アカデミア出版会

木村操 1965『新訂版 こぎん刺繍』講談社

木村操 1976『こぎん』婦人画報社

佐治ゆかり「ハギレの日本文化誌」福島県立美術館（編）『ハギレの日本文化誌～時空をつなぐ布の力～』福島県立美術館 pp.4～13.

ジェイムズ・クリフォード 2003『文化の窮状 20世紀の民族誌、文学、芸術』人文書院

関根達人 2008「こぎんざし」ハンナ・ジョイ・サワダ、北原かな子（編訳）『日本語と英語で読む 津軽学入門』弘前大学出版会

関本照夫 2007「ものを作る技の考察——インドネシアのバティック業から」松井健（編）『資源人類学 06 自然の資源化』東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 pp.287-315.

相馬貞三 1983「雪の炉辺に刺す」秋岡芳夫・谷川健一（編）『日本の技1 みちのく至芸の里』集英社

住友和子（他編著）1998『津軽こぎんと刺し子 はたらき着は美しい』INAX出版

成田貞治 1999『こぎん刺の手引き』（謄写印刷物）弘前こぎん研究所

八田愛子・鈴木堯子（共編）1980『新技法シリーズ 菱刺しの技法』美術出版社

弘前市立博物館 1985『津軽の民芸』弘前市立博物館

福島県立美術館（編）2006『ハギレの日本文化誌——時空をつなぐ布の力——』福島県立美術館

前田セツ 1973『津軽こぎん刺し』（謄写印刷物）花邑

前田セツ 1976『津軽こぎん刺し』日本ヴォーグ社

三上祥子 2006『『農家の妻』から『起業家』へ——津軽地方における女性農業者の生活史研

究——」弘前大学人文学部卒業論文
柳宗悦 1932『工藝 14号』 日本民藝協会
山川暁 2006「清浄の中より来る——糞掃衣の世界——」福島県立美術館（編）『ハギレの日本文化誌～時空をつなぐ布の力～』福島県立美術館 pp.18～21.
横島直道 1974『津軽こぎん』日本放送協会

< 報道資料 >

高橋一智 1963～1964「みちのくの造形 刺しこぎん編」『東奥日報』（昭和 38 年 7 月 14 日～昭和 39 年 5 月 31 日連載）東奥日報社
東奥日報 2008 年 6 月 14 日 「『こぎん刺し』ブランド化へ」
陸奥新報 2008 年 2 月 8 日 11 面（弘前こぎん研究所の広告「内職の為のこぎん刺講習会」）

< Web 資料 >

奈良国立博物館ホームページ

<http://www.narahaku.go.jp/exhib/2006toku/shosoin/shosoin-03.htm>

ルイ・ヴィトンホームページ

<http://www.louisvuitton.com/web/flash/index.jsp;jsessionid=NDSDK25BAERNGCRBX>

[UXFAHYKEG4RAUPU?buy=1&langue=ja_JP&direct1=ebou_menu_jp](http://www.louisvuitton.com/web/flash/index.jsp;jsessionid=NDSDK25BAERNGCRBX)

THE STABLES（雑貨屋）ホームページ

<http://thestables.shop-pro.jp/?mode=cate&cbid=283490&csid=0&sort=n>

（いずれも 2009/01/09 最終アクセス）